

## ハウレンソウ萎凋病（病原菌：*Fusarium oxysporum* f. sp. *spinaciae*）

### ○ 被害と発生生態

本病は、糸状菌によって起こる病害で、本葉の展開期頃から収穫間近まで発生する。病徴は下葉から黄化、萎凋をともなって、生育が不良となり、最終的には株全体が枯死する。被害株の主根や側根の先端部、側根の付け根は黒褐色から赤褐色に変色し、根の導管部は褐変する。被害株の根は白色のカビに覆われることもある。

本病原菌の生育適温は、25～28℃であり、高温になる初夏から秋に雨よけ栽培、ハウス栽培を中心に発生する。病原菌は、被害株、特に被害根とともに土中に残り、おもに厚膜胞子の形で長期間生存し、土壌伝染する。

### ○ 防除方法

#### （ア）耕種・物理的防除

- ・健全種子又は消毒済み種子を使用する。
- ・連作を避ける。連作する場合は、バイオフューミゲーション<sup>1)</sup>、太陽熱、土壌還元等の土壌消毒をする。
- ・収穫後の残根はほ場外に持ち出し処分する。
- ・石灰を施用し土壌のpHを中性近くに矯正する。
- ・発病株は早期に根から抜き取りほ場から持ち出し処分する。
- ・アカザ、シロザなどの雑草が病原菌を保菌していることがあるのでほ場内の除草に努める。
- ・機械や長靴等に付着した土はよく洗い落とし、他のほ場に持ち込まないようにする。

#### （イ）薬剤防除

- ・病害の発生が著しい場合は、土壌くん蒸剤による土壌消毒をする。



ほ場での発病株



根の導管の褐変



主根先端の褐変と細根の枯死

注1) アブラナ科植物を土壌に鋤込み、その分解で生じるイソチオシアネート類等の抗菌性物質により、土壌中の病原菌の活性を低下させることで土壌病害を軽減する手法